

特別支援学級における 働く力を培う授業づくりに関する研究

～ 自ら行動する力とコミュニケーション力を育てる支援の工夫を通して ～

香月弥代子 (福岡市立長尾小学校 教諭)
大垣 琢磨 (福岡市立脇山小学校 教諭)
辻 清香 (福岡市立住吉中学校 教諭)

障がいのある児童生徒たちが、将来、就労して自立した生活を送ることができるように、小学校段階から児童生徒の働く力の育成をめざした教育活動に取り組む必要があると考えている。本研究は、小・中学校の特別支援学級に在籍する児童生徒の将来の就労につながるように、働く力の基礎となる「自ら行動する力」と「コミュニケーション力」の育成に主眼をおいて、その支援の工夫について検証するものである。

I 研究主題設定の理由

1 社会的要請から（知的障がい者の就労の現状から）

近年「障害者の雇用の促進等に関する法律」や「障害者自立支援法」といった法律が整備され、「可能な限り就労による自立・生活の向上を図る」施策がとられている。また「発達障害者支援法」では国や自治体は発達障がい者に対して就労に関する支援を行うことが明記されており、本市の「福岡市障がい児教育プラン」でも「社会的自立を目指す教育」を障がい児教育の充実のための6つの柱として掲げている。このような施策などにより最近5年間の統計では、障がい者の雇用率は緩やか

に上昇している。

しかし過去最高となった20年度の1.59%という実雇用率も法定雇用率を下回っており、経済情勢が厳しい中、障がい者を取り巻く雇用環境は依然として厳しい状況である。また、なんとか就労できても長い時間働くことができない、職場でのコミュニケーションがうまくいかないなどの問題から、短い期間で退職してしまう障がい者も少なくない。

2 新しい学習指導要領から

平成21年3月に新しい学習指導要領が告示された。今回の改訂の基本的な考え方の一つに「自立

と社会参加に向けた職業教育の充実」が示されている。

これを受けて、特別支援学校の高等部（知的障害）では、卒業者の就労働向などを踏まえ、高等部の専門教科として「福祉」が新設されることになった。特別支援学校では、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、一人ひとりの児童生徒の教育的ニーズを明らかにしながら継続的な指導を行うこと、地域及び産業界等の関係機関との連携を図り、産業現場における長期間の実習を取り入れ、就業体験の機会を積極的に設けることなどが求められている。

小・中学校においても児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、小学校からの発達段階に応じた勤労観・職業観の育成がめざされている。

3 児童生徒の実態から

私たち3人が担任している特別支援学級の児童生徒たちは、障がいの状態や発達段階はそれぞれ異なっているが、おおむね指示された作業などに取り組むことができる。しかし自分から主体的に取り組めるわけではなく、教師の指示や補助によって作業していることが多い。

小学校の児童では、育てた野菜の販売活動の場面では、「お客さん」の顔を見て話しかけるなど相手に伝えようとする意識を持つことはできておらず、代金やおつりを伝えるなどの必要な会話もうまくできていない。さらに将来したい仕事を思い浮かべることはできるが、実際に働くことがどういうことか具体的には分かっていない児童も多い。

中学校の生徒では、活動中に困ったり疲れたりしても、自分の気持ちを伝えたり相手の気持ちを聞いたりすることが少ない。そのため活動中や活動後にトラブルになることが多い。また、好きなことをして過ごすということもむずかしく、上手に息抜きをすることができずストレスをため続けていることがある。また、人の話を聞くとともに姿勢をくずしたり下を向いたりして、話し手からの一方的なコミュニケーションになることがある。

4 保護者の要望から

保護者はわが子の将来の幸福な生活を何よりも願っている。そのため、わが子が中学・高校を卒業し、社会生活を送らなければならなくなったときにどうなるのか大変不安に思っている。それゆえ、児童生徒が働くことができ、自分で自立した生活を送れるようになることは、保護者の大きな願いであると言える。特に卒業後の進路の問題に直面させられる中学校の生徒の保護者にとって、就労は切実な問題である。

したがって社会情勢の変化や障がいの有無に関わらず、児童生徒が成長して就労し、自立した社会生活を送れるようになるために、教育活動において働く力を培う授業づくりに取り組むことは意義深いと考える。

5 就労支援の現場の見学から

夏季休業中に障がいのある方々の就労を支援している施設・事業所に見学に行ったり、博多高等学園に勤務しておられた方からお話をお伺いしたりする機会を持つことができた。

私たちは目の前の児童生徒たちが将来、就労している姿をあまりイメージできなかった。しかし、この見学を通して、就労をめざして努力している方々に数多く会うことができた。また発達に偏りや障がいの重さのために就労がむずかしく思える方でも、本人の特性を生かした就労を実現しているケースがいくつもあることを知った。そして、そのような就労の成功のかけには、障がいのある方をありのままに受け入れ、障がいの特性を生かしながら、適切できめ細やかな支援を行う支援員やジョブコーチの方々の姿があった。

また就労支援施設でも博多高等学園でも、小中学校の教師とそれぞれの教育活動についての情報交換や児童生徒の就労を実現するための連携を望む声を聞くことができた。

就労支援の現場の見学を通して、私たち特別支援学級の担任は、それぞれの児童生徒の発達状況や特性を考えながら、将来の働く力を培う授業づくりの工夫と、中学校卒業後にもつながる継続性

を持った支援を考えていく必要性を感じた。

Ⅱ 研究主題の意味

1 「働く力」とは

本研究では、働く力とは障がいのある人が社会の中で必要な支援を受けながら就労するための力であり、「生きる力」と同様にさまざまな力や態度から成り立つ総合的な力と考える。

学校教育では、将来の働く力を培うことを念頭においた取り組みを、すべての教育活動の中で行っていく必要があると考える。

厚生労働省は障がい者の一般就労移行の可能性を評価することを目的に、共通ツールとして「就労移行支援のためのチェックリスト」(2006)を作成した。このチェックリストでは働く場で支援すべき事項を、日常生活(11項目)、対人関係(8項目)、行動態度(15項目)を基本に評価している。

そこで本研究では、中学卒業後にもつながる教育実践を行うために、このチェックリストを活用する。本チェックリストの「日常生活」「対人関係」「行動・態度」をもとに、働く力を「基本的な生活習慣力」「コミュニケーション力」「自ら行動する力」として考え、チェックリストの項目の中から小・中学校の学校教育の中で共通に活用が可能な評価の項目を取捨選択して、そのための支援の工夫を考えることにする。

2 「自ら行動する力」とは

「自ら行動する力」とは、経験したことをもとに喜びや達成感を感じ、次は自らやってみたいと思いう行動する力であると考え。

「自ら行動する力」を育てるためには、自分が周囲に認められたり、活動への達成感や満足感から自信を持ったりすることで、自らやってみたいと思う体験を積み重ねることが重要であり、そのことが将来の「働く力」の基礎になると考える。

3 「コミュニケーション力」とは

「コミュニケーション力」とは、言葉や身ぶりなどを使って、自分の意思や気持ちを伝えたり、相

手の意思や気持ちを理解したりする力であると考えている。

「コミュニケーション力」を育てるためには、表現したいと思う状況をつくったり、他者と関わるような活動場面を仕組んだりすることが重要である。さらに、そのような場面で適切な表現の仕方を学ぶことも必要である。

特別支援学級に在籍する児童生徒たちにとって、他者と関係をつくるコミュニケーション力は、むずかしいものではあるが、将来の就労のために身につけてほしい力と考える。

Ⅲ 研究の目標

小・中学校の知的障がい特別支援学級に在籍する児童生徒の働く力を培うために、授業の中で働く力の基礎となる自ら行動する力とコミュニケーション力を育てる支援の工夫について明らかにする。

Ⅳ 研究の仮説

授業の中で本物に近い活動場面を設定したり、働いている人との関わりを持てたりするように支援の工夫を行えば、児童生徒は自ら行動する力やコミュニケーション力を高め、働く力を培うことができるであろう。

Ⅴ 研究の計画

月	研究事項
5	○研究の構想 ○研究主題の検討
6	○研究主題の決定
7	○研究計画の作成
8	○授業実践の検討と準備 ○施設などの見学
9	○中間報告書の作成
10	○中間報告会 ・授業実践

11	・授業実践 ○実践のまとめ
12	○実践のまとめ ○研究報告書の作成
1	○研究発表会の検討と準備 ○研究報告書 原稿提出
2	○発表会リハーサル ○研究発表会
3	○研究のまとめ

VI 研究の構想

1 研究の内容・方法

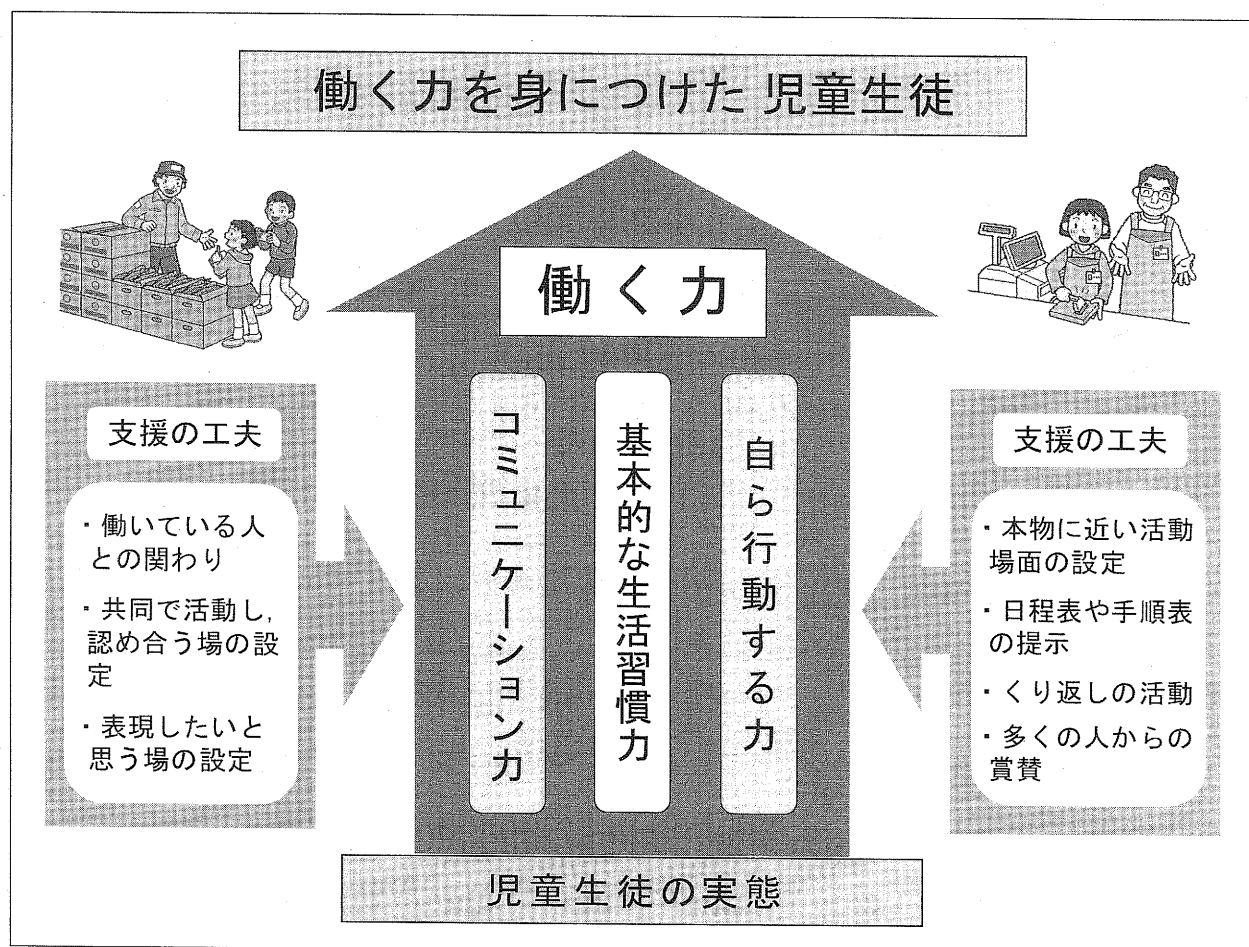
小学校知的障がい特別支援学級で

- ・バザーでの仕事に取り組む生活単元学習「ふれあいフェスタでしごとチャレンジ」
- ・バスの運転手さんの見学と仕事体験を行う生活単元学習「バスの運転手さんになろう」を通して研究する。

中学校知的障がい特別支援学級で

- ・自分たちで校外学習を計画し、実行する「校外学習をプロデュース」を通して研究する。

2 研究の構想図



Ⅶ 研究の実際

事例1 (A小学校 特別支援学級)

生活単元学習

「ふれあいフェスタでしごとチャレンジ」

(1) 単元の設定の理由

本単元は、児童が人と関わりながら働く体験を通して、働くことの楽しさや達成感を味わい、意欲的に働く態度を身につけていくことをねらう学習である。

これまでに児童は、家庭の手伝いから学校の仕事・ボランティア活動へと働く場や活動を徐々に広げてきた。そして、今回はPTAバザー「ふれあいフェスタ」(地域)へと広げ、関わるものや人も広げていく。

バザーでの販売体験は、先生方や友だちだけでなく地域の方とも関わりをもつことができ、より本物の職場に近い体験が期待できる。

また、職場体験を取り入れることで、「働く人」の具体的なイメージを持って、バザーでの接客やバックヤードでの作業ができると考える。

さらに、フェスタ委員さんからの依頼、接客の活動、実際のバザー、振り返りの活動の中で、委員さんから直接アドバイスを受けたり、認めていただいたりすることで、自分の活動に自信を持って、自ら行動することができると思う。

(2) 児童の実態

【自ら行動する力】

指示されたことや決められたことについては、どの児童も取り組むことができる。体験したこと、ほめられたり、達成感を感じたりした内容については、見通しをもち指示されずに自ら行動することができる。

【コミュニケーション力】

挨拶や簡単な言葉によるコミュニケーションは、教師に促されたり、自ら行ったりすることができる。面識のある相手には、非言語コミュニケーションや自分の言葉で伝え合うことができる。

(3) 目指す児童の姿

【自ら行動する力】

職場体験や接客の活動をくり返すことで、見通しを持って自らジュース拭き・ジュースの補充・おまけの種渡しを行うことができる。

【コミュニケーション力】

職場体験や接客の活動をくり返すことで、売場の仲間とのやりとりやお客さんに対して種渡しの言葉かけ・挨拶ができる。

(4) 単元の計画

- ア バザーで仕事にチャレンジすることを知り、活動の見通しを持つ
- イ 職場体験をし、身構えや挨拶の仕方を知る
- ウ 開店の準備と接客の活動をする
- エ 「ふれあいフェスタでしごとチャレンジ」をする(販売活動)
- オ 「ふれあいフェスタでしごとチャレンジ」の活動を振り返る

(5) 支援の工夫

- ア 「自ら行動する力」を高めるための支援の工夫
 - 活動に自信を持つための本物に近い活動場面の設定
 - ・職場体験、くり返しの接客の活動
 - 見通しを持つための教材・教具の設定
 - ・しごとチャレンジ計画表・作業手順図・バザー出店配置図・昨年度のバザーの写真の活用
 - 認めてもらうための多くの人からの賞賛
 - ・フェスタ委員さんからの児童への言葉かけ
 - ・接客の活動に招待した先生方や児童たちによる言葉かけ
 - 身だしなみ、手洗いの仕方を確かめられる職場体験のビデオや写真
 - 各活動をやり通せたことが分かるがんばりカードの活用
- イ 「コミュニケーション力」を高めるための支援の工夫
 - 働いている人との関わり

- ・ロッテリアの店長・店員さんからのご指導
- ・フェスタ委員さんからの賞賛・アドバイス
- 共同で活動し、認め合う場の設定
 - ・ジュース拭きや種渡しの共同作業
 - ・友だちのがんばりを認め合う場の設定
- 表現したいと思う場の設定
 - ・くり返しの接客の活動
 - ・ふれあいフェスタ、種渡し
- 困った時の言葉カード・掲示物の活用
 - ・これまでの学習で活用してきた言葉の掲示物
 - ・個別の言葉カード（挨拶・お礼・種渡しの言葉かけ）

(6) 指導の実際と児童の姿

ア バザーで仕事にチャレンジすることを知り、活動の見通しを持つ

昨年度のふれあいフェスタの写真を提示して、フェスタ委員さんの仕事「ジュース売り場」にチャレンジすることを知らせた。その後、店内での仕事を体験するために、職場体験や接客の活動を行っていく計画を児童とともに立てた。どの児童も「ジュース屋」と聞いて、食べ物に携われることを喜んだり、職場体験ができることを楽しみにしたりしていた。

イ 職場体験をし、身構えや挨拶の仕方を知る

楽しみにしていた職場体験では、制服を着せてもらえたことで喜びの表情が溢れていた。手洗いや身だしなみ、接客の仕方を教えてくださるスタッフの方に安心して接することができていた。

体験を終え、お店の方にC児は「また働きたい」、D児は「ロッテリアで働きたい。」とその場で自分の思いを伝えていた。

客として来てもらった保護者に、自分が作ったハンバーガーを「おいしいよ。」と言って食べてもらったことで、C児・D児はとても満足していた。

ウ 開店の準備と接客の活動をする

実際にバザーで着用するエプロンや三角巾を準備し、できるだけ当日と同じような場を設定して活動した。活動内容は、次の①～④を毎時行った。

①おまけとして渡すひまわりの種の袋詰め、シ

ール貼り作業

②手洗い

③水槽から出したジュースを拭く、接客（ジュース・種を渡す）

④振り返り（フェスタ委員長さんからの言葉かけ）

毎時間、同じ活動をくり返すことと一人で着脱できるエプロン・三角巾の準備をしたことで、身支度や手洗いは、全員自分でできるようになった。

授業の最後に、フェスタ委員長さんから「種を渡す時の言葉かけが丁寧でいいね。」「昨日より顔が上がってよかったよ。」など一人一人の活動に賞賛と励ましの言葉かけをしていただいた。接客の活動をくり返すことで、実際のバザーでの勤務時間をC・D児は「売り切れるまで働きたい。」と意欲を見せていた。A・B児も見通しが持てたことで、「ジュース売る」や「ジュース屋さんする」という言葉を表出するようになった。

エ 「ふれあいフェスタでしごとチャレンジ」をする

A児は、注文されたジュースを段ボールから水槽に補充する仕事と種を渡す活動を行った。B・C・D児は、ジュース拭きと種を渡す活動を行った。はじめは、緊張して前時までのような声量も出なかったが、「売り切りたい」という意欲のため、次第にフェスタ委員さんをまねながら声を出せるようになった。どの児童も休憩時間を設けていたが、C・D児は休憩を止めて予定よりも早く戻り、大変な作業の手伝いをしようと自ら行動していた。A児は決められた時間内の作業を終え、みんなに帰りの挨拶をしてやり遂げることができた。B児は休憩後、用事のため帰宅する予定であったが、両親に「ジュース屋に行く」と言って、お店に戻りたいと両親にお願いをしていたそうだった。

次第に、在庫の数が減っていくことで完売のイメージがもちやすく、終わりの方では、売り切りのための「コーラ、冷えていますよ。」や「コーラ、いかがですか。」のかけ声を前時までよりも大きな声量で伝えることができていた。

販売中、チケット制であるのに誤ってお金を差し出すお客さんに対して、チケット売り場まで手を引いて連れて行く姿も見られた。

C・D児は、最後の1本が売り切れた時、フェスタ委員さんや保護者とハイタッチや万歳をして喜んでいた。「売り切りたい」気持ちを共有しながら売り場の仲間と最後まで活動することができた。オ 「ふれあいフェスタでしごとチャレンジ」の活動を振り返る

日記やプリントで自分の活動を振り返った。学級の話し合いでは、「次は何にチャレンジしようか。」や「来年は何屋さんができるの。」「いらっしやいする。」など次の活動を楽しみに待つ声が多く聞かれた。

学習中、フェスタ委員さんにお礼の手紙を渡した時には、B児は「また仕事ください。」A児は「ありがとう。また来てね。」と自分から言葉を伝えることができていた。

(7) 考 察

ア) 「自ら行動する力」を高めるための支援の工夫について

- ・ 職場体験は、本物の「お店」を体感し、仕事に対する具体的なイメージをもつことができた。また、働きたい意欲があとの身支度や挨拶などの行動に表れ、とても有効であった。
- ・ くり返しの接客の活動は、フェスタ「ジュース屋」に近い条件で活動できたので、本番のフェスタでもそれぞれが自ら行動することができ、重要な活動であった。
- ・ 見通しを持つためのしごとチャレンジ計画表、作業手順図、バザー出店配置図、昨年度のバザーの写真の活用は、視覚的に分かりやすく有効であった。しかし、より効果を高めるために板書や掲示の仕方に工夫が必要であった。
- ・ フェスタ委員さんからの各児童への言葉かけは、活動中のよい点を認めてもらうことで次の活動への自信となった。賞賛してもらった行動は次時にも見られたり、新たに友だちのよさを取り入れて行動したりしていたので、とても効

果的であった。

- ・ 接客の活動に招待した先生方や児童たちによる言葉かけは、励みとなり、「お客さんが来て欲しい」という気持ちを高める点でも有効であった。
- ・ 身だしなみ・手洗いの仕方を確かめられる職場体験のビデオや写真は、清潔の必要性を意識づけながら正しい方法を確認することができた。どの児童にも視覚的に分かりやすく、資料として有効であった。
- ・ 各活動をやり通せたことが分かるがんばりカードは、シールを貼るタイミングを毎時一貫することができなかった。分かりやすい教具と簡単な作業で、次の活動に移れるとよかった。

イ) 「コミュニケーション力」を高めるための支援の工夫について

- ・ ロッテリアの店長さんや店員さんとの関わりは、働いている人を身近に感じることができ、よいモデルとなった。職場体験の場で自分からお礼を伝えたくなったり、バザー後に結果を伝えたくなったりする程、貴重な存在であった。
- ・ フェスタ委員さんからの賞賛やアドバイスは、委員さんとの関係づくりとしても大変有効であった。当日のバザーでも頑張っている姿を見せようと自分から声をかけ、かかわろうとする児童もあり、作業意欲にもつながった。
- ・ ジュース拭きや種渡しの共同作業を取り入れたことで、友だちと交代でやったり、声をかけ合ったりする姿が見られた。新たなコミュニケーション活動も生まれ、有効であった。
- ・ 友だちのがんばりを認め合う場を設定したことで、自分が認められた喜びと友だちのがんばりを見つけられた実感を味わうことができた。また、認め合うことで働く仲間の意識を高めることにもつながった。
- ・ くり返しの接客の活動やふれあいフェスタ、おまけの種渡しは、働く仲間とお客さんとコミュニケーションをとる機会が常にあり、言葉や作業で表現する場となった。予期せぬことへも

「売りたい」気持ちで対応することができた。

- ・ これまでのやりとりで活用した言葉の掲示物は、返事に困った時に手がかりとして見に行く児童もあり、有効であった。
- ・ 個別の言葉カードは、各児童の手元に置いておいたが、くり返しの接客の活動の途中で「なくても大丈夫」という児童や見なくても手元に置いておくことで安心して活動する児童もいた。徐々に言葉に自信を持つことにもつながった。

事例2 (B小学校 特別支援学級)

生活単元学習

「バスの運転手さんになろう」

(1) 単元の設定の理由

本単元は、バスの運転手さんの見学と仕事体験を通して、自ら学習に取り組み、作業の手順と方法を理解して正しく行える力と、相手の問い合わせや要望を理解して、適切に対応できる力を育てることをねらいとしている。またバスの運行の仕事が、乗客の安全と利便性を考える心づかいと努力によって行われる仕事であることを理解させ、働く責任とすばらしさに気づいてほしいと願う単元である。

本学級のA児はバスに大変興味を持っている。そのため、見学で運転席に座ったり、車内のさまざまな計器をじっくりと見たりできることは、A児にとって感激するほどの体験だと言える。さらに「運転手さんになる」練習を行うので、A児が意欲的に取り組むことができると考える。

営業所の見学で、バスを発車させるまでの始業前点検やさまざまな持ち物の管理とその携行、運転する際の安全に配慮した細かな手順、そして乗客の問い合わせや要望に応えるために、さまざまな会話や行動を行っていることを知ることができる。そして「運転手さんになる」練習とその発表会を行い、運転する際の細かな手順と乗客に応える会話や行動の練習をすることで、「自ら行動する力」と「コミュニケーション力」を育てることができる。

(2) 児童の実態

本学級の児童は、4年生男子A児1人である。算数と生活単元以外の学習は、すべて交流学級で行っている。学習には意欲的に取り組み、当該学年の学習内容をよく理解し身につけている。また交流の大きな目的である社会性に関しても、休み時間には自分から外に出て友だちと一緒に遊ぶようになるなど、少しずつだが成長している。自分の持ち物などを交流学級に置き忘れてくることなどはあるが、基本的な生活習慣も身につけている。

【自ら行動する力】

学級の畑での農作業では、野菜の収穫を楽しみにしており、20～30分の畑作業を途中で遊んだりすることなく行うことができる。そのほかの作業でも指示されたことは最後まで行うことができる。野菜と支柱をつなぐひも結びなどのような細かい手作業や道具の片づけなどは苦手である。

【コミュニケーション力】

教師から指示されたことは問題なく理解できる。昨日の出来事を思い出して発表するときなど、すぐに言葉が出てこないときがある。また一方、自分が困ったときに、その状況を少しずつ説明できるようになってきた。また交流学級での給食の時間に、同じ班の友だちとふざけあう姿も見られるようになってきた。今後は相手の気持ちを推測して行動できるようになってほしいと考えている。

(3) 目指す児童の姿

【自ら行動する力】

活動内容に興味を持って自ら学習に取り組み、作業の内容や手順を理解して、正しく行えるようになる。

【コミュニケーション力】

相手の問い合わせや要望の内容を正しく理解し、適切な言動で応えられるようになる。

【働くことへの関心・知識】

バスの運行の仕事が、乗客の安全と利便性を考える心づかいと努力によって行われていることを理解し、働く責任とすばらしさに気づき、働くことに夢とあこがれを持てるようになる。

(4) 単元の計画

- ア 「バスの運転手さんになろう」の学習について知る
- イ 営業所見学に行く
- ウ バスの運転手さんになる練習をする
- エ バスの運転手さんの仕事の発表会をする
- オ 学習を振り返って、お礼の手紙を書く

(5) 支援の工夫

- ア 「自ら行動する力」を高めるための支援の工夫

- ・ 自ら意欲的に学習に取り組むことができるように、A児が興味を持っているバスの運転手の仕事を取り上げ、「バスの運転手さんになって、仕事の発表会をしよう」という学習課題を提示する。
- ・ 運転手さんの仕事体験への意欲が高まるように、営業所の方をお願いして、運転手さんの本物の帽子やネクタイをお借りし、仕事体験のときに身につけさせる。
- ・ 運転手さんの仕事の内容と手順を理解し覚えられるように、その手順表を作成し、いつも見られるように掲示しておく。
- ・ 運転手さんの仕事の内容と手順を理解して、正しく行えるように、運転手さんの仕事をくり返し練習させる。
- ・ 運転手の仕事がうまくできているときには、達成感や満足感が高まるように、そのつど賞賛する。また発表会のときなど他の先生にもほめていただくようにする。

- イ 「コミュニケーション力」を高めるための支援の工夫

- ・ 仕事体験の際に乗客にアナウンスをしたり、問い合わせや要望に応えたりする活動場面を設定し、取り組めるようにする。
- ・ アナウンスの言い方をおぼえ、間違えずに言えるように、くり返し練習をさせる。
- ・ アナウンスの内容と手順が分からなくなったときは、すぐに確認できるように、学習中はA

児の手元に手順表を用意しておく。

- ・ 次のバス停の案内や乗り降りの確認などのきまったアナウンスができるようになってきたら、乗客の問い合わせや要望などの自分で考えて行わなければならない場面を少しずつ増やしていくようにする。
- ・ また、その場合に、よい対応ができるように、乗客の問い合わせや要望がどのようなものか、その意味を考えさせる。A児が思いつかない場合には、一緒に考えながら、よりよい対応の仕方を教えるようにする。
- ・ 楽しく勉強ができたことを思い出させることで感謝の気持ちを持たせ、お礼の気持ちを伝える場として、単元の終わりにはお世話になった営業所の方に手紙を書き、お礼を言いに行く活動を設定する。

(6) 指導の実際と児童の姿

- ア 「バスの運転手さんになろう」の勉強について知る

A児に「大きくなったら、どんな仕事がしたい?」とたずねると、即座に「バスの運転手さんになりたい」と答えが返ってきた。「じゃあ、ひまわり学級でバスの運転手さんになってみようか」と言うと、「えっ、できると?」と興味津々でたずねてきた。しかし運転手さんの車内での細かな動作や、バスに乗っていないときにどんなことをしているかについては、A児は知らなかった。

そこで校区にある営業所に見学に行くこと、見学して分かったことをもとに運転手さんの仕事の練習をして、バスの運転手さんの仕事の発表会をすることを知らせた。A児は福岡市内の全路線とその経由地、行先番号などを知っているほど、バスに興味を持っている。しかし普段は自宅の車で移動しているので、バスに乗ることはめったにない。そのため学校からバスに乗って営業所に行き、営業所を見学できることが分かり、とてもうれしそうだった。

- イ 営業所見学に行く

見学での視点を持たせるために、バスの運転手

さんはどんな仕事をしているか考えさせた。しかしバスの運転や止まる停留所のアナウンスぐらいしか思いつかなかったので、運転とそれ以外の仕事に分けてメモを取らせるようにした。

営業所に着くと、居並ぶバスの姿を見て歓声を上げるなど、すぐに興奮気味になった。中に入り簡単な挨拶をすませると、営業所の方がすぐに運転手さんの制服を着せてくださった。本物の制服を着ることができたおかげで、A児の意欲はぐんと高まったようだった。

事前に見学のねらいを営業所の方に伝えていたので、運転手の方が営業所に出勤してから、アルコール検査やバスの乗車前点検など、運転以外にもいろいろな仕事があること、何よりも安全が第一なので、そのための確認やアナウンスがあることも話していただき、A児もその仕事の大切さを理解したようだった。

ウ バスの運転手さんになる練習をする

翌日、見学で分かった運転手さんの仕事を①営業所に出勤してから乗務するまで(=点検以外)、②バスの点検、③乗務中、④乗務後の4つに分けて整理し、4つの仕事をA児がどのように真似をするか手順表を作った。

バスの仕事体験は、教室にイスを並べてバスに見立て、運転手さんの仕事練習をするようにした。エンジンの点検といっても、本当にエンジンがあるわけではない。しかし営業所でも運転手さんが指さしと呼称で点検していて、声に出すとA児本人だけでなく、見ている者にもはっきり分かるので、「エンジン異常なし」、「ドアを閉めます」などと言いながら動作するようにした。

乗務中のアナウンスひとつとっても、降りるお客さんやバス停のお客さんがいるかないかで言い方が変わってくる。そのさまざまな言い方を一度にすべて覚えさせるのではなく、「降りるお客さんがいないときは…」とそのときの状況を理解させながら、アナウンスの言い方を増やしていった。そして、A児に手順表を何度もくり返し読ませて、言い方を覚えさせた。またアナウンスを上手に言えるようになると、行き先の問い合わせやニモカ

のチャージなどお客さんの問い合わせや要望にこたえる場面の練習もするようにした。

同じことをくり返す一見単調に見える練習も、運転手さんの仕事の発表会の場を設定したことで、「運転手さんになって仕事を見てもらおう」という課題意識を持つことができた。またA児が興味を持っているバスの運転手さんの仕事の練習なので、仕事の手順表を家に持って帰って練習したり、休み時間に机の中から取り出して読んだりするなど、自分から仕事での動作や言い方の練習に取り組む意欲的な姿が見られた。

エ バスの運転手さんの仕事の発表会をする

本研究の検証授業を兼ねたバスの運転手さんの仕事の発表会では、多くの参観者があったにもかかわらず、A児はあまり緊張することもなく運転手さんを演じることができた。

参観者の方が適宜、乗客となって、バスに乗り降りしたり、A児に行き先をたずねたりしたが、練習では経験したことがない問い合わせにも、A児は自分なりに考えて対応をすることができた。また多くの参観者の方がいることは、運転手になっている自分のがんばりを見てもらえるうれしさや運転手の仕事をやってみせることができる達成感につながっていたようだった。授業の終わりにうまくできたことをほめられてとても喜んでいた。

そして授業のまとめで、営業所の方からのビデオメッセージを見せた。本単元でのA児のがんばりをほめ、乗客の安全に配慮する運転手の方の苦労などについて、営業所の方が話してくださったビデオメッセージを見たことで、A児は運転手の方の心づかいと努力を再確認し、これまでの学習の達成感と満足感が感じていた。

オ 学習を振り返って、お礼の手紙を書く

発表会の翌日、これまでの学習を振り返らせるために、お世話になった営業所の方へのお礼の手紙を書かせた。

A児には見学などでお世話になったことと合わせて、この勉強で学んだ運転手さんの仕事の大変さを思い出して、手紙を書くようにアドバイスをした。A児は早い人で朝4時半ぐらいには営業所

に出勤していることなど、営業所見学で知った運転手さんの努力や苦勞、そして自分が練習してみても分かったバス停のアナウンスや乗客への対応の大変さを手紙に書いていた。

また教室に掲示している見学のときの写真やビデオメッセージのことを伝えたと感謝の気持ちを手紙に書くことができた。

お借りしていた運転手さんの制服と手紙を持って営業所にお礼に行ったときは、出入りするバスや掲示しているチラシ類が気になっていたようだが、お礼の言葉とともに手紙を渡すことができた。

営業所から学校に戻ってくる途中で、「次は地下鉄の仕事の勉強をしたいなあ」と、次の学習への期待感を口にしていた。

(7) 考 察

ア)「自ら行動する力」を高めるための支援の工夫について

- ・ A児が興味を持っているバスの運転手さんの仕事を取り上げたことは、意欲的に活動に取り組むうえで大変効果的であった。

特に、バスの運転手になる練習ではアナウンスの仕方をおぼえるだけでなく、乗客の乗り降りの状況によって変わるアナウンスの仕方を、根気強く、何度もくり返し練習に取り組むことができた。

- ・ 普段はあまり注意して行わない着替えや服の片づけにも、自分から注意深く取り組んでいた。

また服の着替えと片づけの際、チェック表で確認させたことは、きちんと作業ができるために効果があったと思う。

- ・ 児童が達成できそうな課題を考えて設定し、取り組ませたことは、児童に達成感と満足感を感じさせることができ、教師の賞賛と合わせて次の活動の意欲にもつながっていた。
- ・ 「運転手さんの仕事の発表会」の場を設定したことで、学習の見通しと課題意識を持たせることができた。
- ・ 働くことを学ぶうえで、「本物の仕事」の現場や人に出会うことができるのは、仕事のやり方

とその意味、仕事への責任を理解するうえで、児童に対して大きな説得力を持っている。

また現場の人からのあたたかい関わりは、児童の意欲の増大や持続の点で、教師とはちがう大きな力を持っていることを感じた。

イ)「コミュニケーション力」を高めるための支援の工夫について

- ・ 社会科の見学などでは、自分が興味を持ったものに目が行ってしまい、説明してくださる方に注意して話を聞くことがむずかしいが、興味を持っているバスの見学のためか、説明をしてくださる方を見ながら話を聞くことができた。

またその話と関係ないことではなく、話の内容を聞いて思いついたことを質問することができた。

- ・ 乗務中のアナウンスの言い方を手順表にして常時掲示したり、児童の手元に持たせたりしておくことは、適切な表現の仕方を学び、身につけていくうえで役立った。
- ・ くり返し練習に取り組んでいくことは、児童の達成感の増大を伴い、適切な表現の仕方を身につけるうえで有効であった。また、行き先や停留所をたずねられるような対応でも、くり返し練習をするうちに、その場で状況を考えて対応できるようになってきた。
- ・ きまりきった手順ではなく、相手からの問い合わせや要望にこたえるような、自分で考えて行う対応に関しては、まず、その相手が言っていることや状況を十分理解させることが大切である。そのうえで今まで身につけた対応を思い出したり、自分でどうすればいいか考えたりさせるようにする。また適切な対応の仕方を教えていくことも大切である。

事例3 (C中学校 特別支援学級)

生活単元学習他 「校外学習をプロデュース」

(1) 単元の設定の理由

本単元は、図書館やスポーツセンターなど地域

の福祉施設の利用方法を知り、校外学習を自分たちで計画を立て実行していくことで、自ら行動する力とコミュニケーション力の向上をねらう学習である。自ら行動する力を「自分で計画を立てて生活する力」とすると、さまざまな施設の利用の仕方を知ること、自分で余暇の過ごし方を考えて行動する力が高まると考える。また、活動の中にグループで行動したり計画を立てたりする話し合いを組むことでコミュニケーションの力もつけられると考える。

本単元は生活力の向上や協力する姿勢づくりにたいへん役に立ち、仕事以外の楽しみを持ったり休日を楽しんだりということによって精神面のリフレッシュを兼ね、就労を続ける力になると考える。また、専門教科の教師がそれぞれの分野を指導していくことでより専門的な知識の習得にもつながると考える。

このような理由から本単元を設定した。

(2) 生徒の実態

【自ら行動する力】

決められた仕事や指示された作業についてはおおむねすることができる。特に、ほめられたりご褒美をもらったりといった経験がある内容については自ら意欲的に取り組む。しかし、初めての内容や興味がない内容であればなかなか取り組もうとしない。ほめられたい、人の役に立ちたい、必要とされたいという気持ちはほとんどの生徒が持っている。

【コミュニケーション力】

作業学習などで「挨拶・報告・連絡・相談」など決まった流れでの会話はある程度できるが、うれしい気持ち・つらい気持ち・感謝の気持ちなどを上手に伝えることはむずかしい。また表情や姿勢などもコミュニケーションの大切な部分であることが理解できず大事な部分が伝わらないことがある。

(3) 目指す生徒の姿

【自ら行動する力】

「ほめられた」「人の役に立てた」「必要とされた」という経験を思い出し、意欲的に課題に取り組むことができる。さまざまな教科の授業や学校行事の体験を積み重ねることで自ら行動する力を高め、困ったときに臨機応変に自分で考えて行動することができる。

【コミュニケーション力】

「挨拶」「返事」はもちろん、日常的な会話でも笑顔や姿勢など体全体で気持ちがよい表現ができる。人をほめたりがんばりを認めたり、感謝の気持ちを伝えることができる。

(4) 単元の計画

ア どこに出かけるか考える。(生活単元)

- ・ 行きたい場所の決定
- ・ ツアーコンダクターの決定

イ 日程や交通手段など細かい計画を立てる。(生活単元)

ウ バスや電車の時刻表の見方、料金表の見方を勉強する。(社会)

エ お金の計算、時刻の計算をする。(数学)

オ 街の中の英単語を知る。(英語)

カ 天気予報の見方を知る。(理科)

キ お礼の気持ちを伝える。(国語)

ク アルバムをつくる。(技術・家庭科)

ケ 学習内容を振り返る。(生活単元)

(5) 支援の工夫

ア 「自ら行動する力」を高めるための支援の工夫

- ・ 自分たちが行ってみたい場所を自分たちで決めることができるように資料を用意する。
- ・ 見通しを持って授業に取り組めるように日程表を準備する。
- ・ お互いに「役に立っている」「必要とされている」と感じるために、学年を意識したグループを作り活動させる。
- ・ 認め合うことで仕事のできた成就感や達成感を持つために、相互評価などでお互いをほめ合う活動を仕組む。

イ 「コミュニケーション力」を高めるための支援の工夫

- ・ 上級生・下級生を意識して会話をするようにするために、学年を意識したグループで活動させる。
- ・ 活動ごとに、お互いのよかったところやがんばったところを表現する場面をつくる。
- ・ 共同して活動する場の中で、自然と助け合う環境をつくる。
- ・ よりよいコミュニケーション活動につなげるために、必要に応じて具体的な言葉や表現方法を教える。

(6) 指導の実際と生徒の姿

ア どこに出かけるか考える。(生活単元)

生活単元の中で、近くのサービス機関を調べ、「無料で利用できる」を条件に行ってみたい場所を絞っていった。「障がい者スポーツセンター」、「南図書館」、「博多市民図書館」、「福岡市動植物園」、「九州エネルギー館」、「防災センター」などがあがり、3年生を中心にそれぞれに担当を決め、校外学習をプロデュースするツアーコンダクターの仕事させることにした。

3年生は、実際に自分たちで決められることに期待ととまどいを感じたようである。「自分が行きたい場所」への校外学習をプロデュースすることに責任感を感じ、他教科の授業でも意欲的に活動していた生徒もいた。

イ 日程や交通手段など細かい計画を立てる。(生活単元)

年間行事を見ながら校外学習の日程を決め、校外学習の時期にそれに関する授業をどの教科でも組めるよう計画を立て、同時進行できるようにした。生徒には自分たちで教科担任に自分がどんなことをするのか説明するよう指導した。細かい計画については、自然教室や修学旅行の流れを思い出させ、参考にさせた。

ウ バスや電車の時刻表の見方、料金表の見方を勉強する。(社会)

事前にツアーコンダクター役の生徒を教科

担任に伝えておき、その生徒が責任を持って交通手段や料金等を調べられるようにした。パソコンが苦手な生徒も、自分がツアーコンダクターをすることで責任感を持ち、自分からパソコン操作を聞いてくる場面もあったようである。

実際の校外学習の場では、地図を使って位置関係を学習していたことを思い出し、駅やバス停の地図を見ながら方向を確認して行動することができた。

エ お金の計算、時刻の計算をする。(数学)

大きな数の計算(お金の計算)ができるように指導を依頼した。計算が得意な生徒には割引などの発展課題も準備を依頼し、計算が苦手な生徒には電卓を使用させるなど、機能的アプローチで全員が同じ課題をこなせるように指導を依頼した。

全員同額のお小遣いを持たせた校外学習では、食事代とお土産代を自分で払うことで、具体的なお金の価値も理解できたようである。

オ 街の中の英単語を知る。(英語)

アルファベットの書き取りのほかに、身近な英単語をテーマに「exit」や「station」など街中で見かける単語を中心に授業を依頼した。

通常英単語は小文字で学習するが、実際街で見かける単語はほとんど大文字で表記してあるため、大文字での単語の学習をやっておけばもっと読める単語が増えたように思う。

カ 天気予報の見方を知る。(理科)

なんとなくテレビで見ている天気予報を、降水確率や〇〇注意報、警報など、細かい情報の見方の授業を依頼した。天気に興味がある生徒は楽しそうだったが、興味をまったく示さない生徒もいた。降水確率を見て、雨具を準備してくる生徒が増えた。

キ お礼の気持ちを伝える。(国語)

言葉での挨拶のほかに、学校に戻ってお礼状を書かせた。感謝の気持ちを伝える大切さとともに、「大人」としての常識的な手紙の書き方を学習させた。また、図書館には掲示できるよう

に台紙にお礼カードを書き送った。いろんな形でお礼を伝えることができること、カードや台紙で表現する楽しみも学べたように思う。

ク アルバムをつくる。(技術・家庭科)

デジカメで撮ってきた写真をサーバに入れ、全員が好きなように見られる状態を作り、それぞれに気に入った写真をアルバム作成ソフトで貼っていきアルバムを作るという作業をした。アルバムにコメントを書く際に、レシートから店名や購入したものを読み取る生徒がいたのでその様子を見て次の校外学習からはレシートを大切に持って帰る生徒が増えた。

行事ごとにアルバムを作成させているため、上級生になると操作も早く簡単に作ることができるようになっていた。できあがったアルバムはその場でプリントアウトし、全員で評価しあった。それぞれの個性が出た作品で記念にも残すことができた。パソコンの基本操作を覚えながら、自分で好きな写真を選び作品を作っていくことは趣味や余暇利用にもつながる経験になったようだ。

ケ 学習内容を振り返る。(生活単元)

アルバムやしおりを見ながら自分の活動を振り返らせた。3年生からは「自分たちが決定できる」「1・2年生をひっぱっていく」という体験にやりがいを感じ、「またやってみたい」という意見があった。1・2年生からは、さっそく次の校外学習の計画を立てようと、福岡市の地図やパンフレットを持ってくる姿があった。全体的には、自分のグループがプロデュースした校外学習がうまくいったことで、次のグループのプロデュースをアドバイスする姿がでてきた。

(7) 考 察

ア) 「自ら行動する力」を高めるための支援の工夫について

- ・ 実際に3年生が教師の代わりに先頭を歩いて1・2年生を連れて行きリーダーの仕事をすることは、3年生としての責任や喜びを感じさせ

るだけでなく、常に1・2年生の見本になろうとする意識を高めるうえでも効果的であった。

- ・ 最初に自然教室や修学旅行の流れを思い出させたことは、校外学習を計画し実行するという仕事に見通しを持って取り組む参考になったようだ。
 - ・ 最初に3年生と一緒に計画を立て、3回目の校外学習ぐらいから少しずつ教師が手を入れるのを少なくしていった。何回か繰り返すことで、計画の立て方も上手になり次はもっとおもしろい計画を立てたいと思うようになったようである。
 - ・ 各授業の中で取り組んでもらった、生徒同士のほめ合う・認め合う活動はクラスの中での大切な一人であるという立場を実感することができ、たいへん有効な活動であった。いろんな教師がそれぞれの授業の中で、ほめるだけでなく、生徒同士の中で「役に立っている」「必要とされている」と感じさせる場面を仕組むことが、結果的に「自ら行動する力」につながったと思う。
- イ) 「コミュニケーション力」を高めるための支援の工夫について
- ・ 上下関係や年齢差など、小学校ではなかった新たな人間関係に出会うのが中学校である。今回学年を意識したグループを作成したことは、先輩・後輩の関係をはっきりさせ、先輩は先輩らしく、後輩は先輩のいいところを学ぼうとすることで、言葉遣いや態度の指導が入りやすくなったのではないかと考える。
 - ・ 話す側の態度の指導に加え、聞く側の態度の指導もしていくことで、話しやすい環境を作り、話す側が自信をもって話すことができるようになったのではないかと考える。また、聞く側の態度が変わったことで聞く側も真剣に人の話を聞き、話す側の良いところを見つけるきっかけになったのではないかと考察する。
 - ・ 障がいによっては、目を合わせるのが苦手な生徒や集団活動が不得意な生徒がおり、全体で

指導する場合には教師の障がいに対する共通理解と共に、彼らへの対応が課題である。

VIII 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 自ら行動する力について

- ・ 実際にお店などを見学し、本物に近い活動場面を設定して仕事の体験をすることは、仕事をする責任や喜びを感じることができるだけでなく、挨拶の仕方や手を洗うことの必要性など、ひとつひとつの作業の意味を理解するうえでも効果的であった。
- ・ 「バザーでお店を開こう」など、内容や目的が分かりやすい活動を設定することで、児童生徒が単元全体の活動への見通しをはっきりと持つことができた。
- ・ それぞれの児童生徒に適した作業を設定し、その作業ができるようになるために、十分な時間を取ってくり返し練習に取り組むことは、児童生徒が達成感や満足感を感じることができ、次の学習や活動への意欲にもつながり有効であった。
- ・ 活動や作業の仕方を自分で把握したり確認したりするための日程表や手順表の活用や、作業が適切に行われているか自分で確認するためのチェック表の活用も、活動や作業への見通しと振り返りのために有効であった。
- ・ 児童生徒が活動に取り組むなかで、よさやがんばりをほめてもらえることは、活動への意欲や自信につながっていった。

また、ほめてくれる人として、担任以外の教師、ゲストティーチャーや働いている人など、多くの方から賞賛を受けることも有効であった。

中学校では、担任以外のさまざまな教師が生徒に関わるので、生徒のよさやがんばりを多面的につかむことができ、生徒も多くの人から賞賛を受けることができた。

(2) コミュニケーション力について

- ・ 働いている人との関わりを持つ場を設定する

ことで、働いている人を身近に感じてよいモデルとして活動したり、自分から言葉を伝えたりすることができた。

- ・ 共同で活動する場を設定することで、声をかけ合ったり役割分担したりする姿が見られた。

また認め合う場を設定することで、自分が認められたことや友だちのよさを感じたり、仲間意識が高まったりすることができた。

中学校では、自主性や社会性の発達を考慮して、生徒同士でほめ合い認め合う活動を行うと、関係性が高まるだけでなく、それぞれの自尊心も高め、自ら行動する力をより発揮できた。

- ・ お客さんに声をかけるバザーを活動の場として設定したり、学習中に聞く側の態度を指導して話しやすい環境を作ったりしたことで、表現したいと思う気持ちが高まった。
- ・ 中学校では、学年を意識したグループを活用して、先輩・後輩を意識させることで、その場に適した言葉遣いや態度の指導を行うことができた。

2 今後の課題

- ・ 障がいのある児童生徒に対するキャリア教育（勤労観・職業観を育てる研究）の理論と実践について理解を深めること（特に働く力を構成する諸要素の整理）。
- ・ 児童生徒が意欲を持つことができるような職場体験の場の開発と、職場体験を生かした単元構成の工夫
- ・ 教科担任制である中学校で、「働く力を培う」授業の教師間での共通理解と各教科の教育計画への組み込み
- ・ 就労支援教育の現場に立つ博多高等学園や特別支援学校高等部と連携した研究の推進

<引用・参考文献>

- 厚生労働省 2006年 「就労移行支援のためのチェックリスト」
 - 福岡市教育委員会 2003年 「障がい児教育プラン」
 - 岩手県立総合教育センター 2008年 「特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック（理解編）（実践・資料編）」
 - 東京都教育委員会 2009年 「知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進」
-

研究指導者

宇美町立子ども療育センター すくすく

園 長 藤田 庸久

福岡市発達教育センター

研 修 係 長 向江 勇二

主任指導主事 小崎 俊司